『西鶴諸国はなし』における越境の意味

趙　心如

一、はじめに

貞享二年（一六八五）正月に刊行された『西鶴諸国はなし』大本五巻五冊は、各巻七話計三十五話よりなる短編説話集である。作者西鶴は、日本の全国を舞台にしながら、各地の奇談逸話を取り上げ、自分なりの見方と解釈を加えて話を再構成しようとした。「西鶴」が日常から脱出し、「諸国」を遍歴する旅に得た不思議さに満ちる話材を用い、常識を超える「はなし」を書いたという創作姿勢から見れば、『西鶴諸国はなし』は「西鶴様式・諸国話形式・はなしの方法」という越境の重層構造が備わっていると考える。そもそも西鶴の浮世草子の第一作『好色一代男』については、すでに「二つの対立する世界―遊里・堂上／浮世・地下と、それを隔てる境界、そして境界を自由に越える主人公」で構成される基本的な作品構造がある(1)。本稿は、越境という視点を一つの切り口として『西鶴諸国はなし』の解読、分析を試みた。

二、境界と越境

境界とは、二つ以上の領域が相接するところを示すものである。この簡明かつ具体的な定義から、境界は同質の領域を包括し、異質の領域を区別するための存在であるとわかる。一般的には境界という概念は、こうした地理的分断や区切りの意味においてよく用いられてきたが、抽象的な視角から見れば、境界は境界の内側、つまり自分の力が及ぶ範囲と、未知なイメージが伴い、制御のきかない境界の外側を隔てるという役割を担っている。確かに境界の内側と外側の秩序を強化し、外来者の侵入を阻むためには、境界の存在が必要であり、この包摂と排除の論理、分割と媒介の機能こそ境界の特徴であると考えられる。

文学研究における都市論の先駆的研究者である前田愛氏は、民俗学と文化人類学の研究成果を都市空間論に巧みに織り込み、境界という概念に対して独自な見地を披露した。都市小説論の集大成としての『都市空間のなかの文学』[2]の中で、前田氏はドイツの哲学者・社会学者であるG・ジンメルのエッセイ「橋と扉」を引用し、結合と分割の両義性をはらんだ橋の境界性をときあかしたうえで、橋に象徴されているのは人間の意志の領域が空間へと拡張されて行く姿であるという西洋的な見方と、橋と扉のほかに峠・坂・渚・三叉路・十字路などの、より自然的な境界をつけくわえ、橋をふくめてこれらの境界は昔から土地の精霊が宿る禁忌の場所として畏怖され崇敬されてきたという日本人の認知を比較分析した。また柳田国男氏が採集した境界にまつわる民俗をふまえながら、境界の両義的な性格を強調している山口昌男氏の境界論[3]を援用し、テクスト空間のなかの境界は、あらかじめ与えられた障壁として固定されているものではなく、むしろ登場人物の行動によってさまざまなイメージが顕在化してくると把握した。文学テクストの中の境界は、必ずしも実在する空間の境界に対応して位置づけられるとは限らないと考えた前田氏は、透

明化している境界が作中人物の越境という行為を通じてはじめて隠されている意味合いを浮上させた。換言すれば、境界の意義は越えられる時点でこそ、いっそう明らかに示すことができるのである。

『西鶴諸国はなし』では、異類が人間界に闖入し、また人間が異界へ訪問するなどの越境行為は、確かに既存の秩序を大胆に破壊し、果敢に禁忌に挑戦する行動ともいえる。一方、越境により、境界の両側の接触や交流が深められ、話の新しい可能性も賦与された。『西鶴諸国はなし』における越境の意味を究明するには、まず序文から検討を始める。

三、『西鶴諸国はなし』における越境―序文からの展開

本文とのつながりがいつも重要視される『西鶴諸国はなし』の序文は、西鶴の読書圏と情報源を確認するための糸口として多くの研究者が素材や典拠の探求に没頭し、数々の業績を残してきた。この序文を通して西鶴は広い世間に目を向け、各地の珍物奇事に興味を抱いていたことがうかがえる。また西鶴の創作意識も巧みに序文に託し、作品の主題が明らかに読み取れるのである。

ここで序文の文脈を確かめるために、原文を引用しておくことにしよう。

> 世間の広き事、国々を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ。熊野の奥には、湯の中にひれふる魚有。筑前の国には、ひとつをさし荷ひの大蕪有。豊後の大竹は手桶となり、わかさの国に、弐百余歳のしろびくにのすめり。近江の国堅田に、七尺五寸の大女房も有。丹波に、一丈弐尺のから鮭の宮あり。松前に、百間つゞきの荒和布有。阿波の鳴戸に、竜女のかけ硯あり。加賀のしら山に、ゑんまわうの巾着もあり。信濃の寐覚の床に、浦島が火うち筥あり。かまくらに、頼朝のこづかひ帳有。都の嵯峨に、四十一迄大振袖の女あり。是をおもふに、人はばけもの、世にない物はなし(4)。

一見すれば、素材の羅列と奇談の集録というものが序文の大部分を占めるのである。「国々を見めぐりて」、諸国を歴訪していた西鶴は、「世間の広き事」を驚嘆しながら、途中の見聞を「はなしの種」として収集していたという冒頭の一句から、西鶴取材の基本的な姿勢が看取できると思う。ここの「世間」とは、日常的、直接的に経験する視圏以外の領域のことを指している。つまり、日常的な生活圏以外の範囲を意味している。人間は未知の世界に対し、好奇心あるいは冒険心が自然に湧いてくるので、ついに日常を離れ、非日常に出発した。「熊野の奥・・・」以下、各地の珍しい特産物や常識では理解不能の人間模様が描かれた。西鶴は虚・実の間に存在する境界を曖昧模糊させ、話の空間を創出しようと試み、現実から遊離する世界の拡張によって物語の新しい地盤を形成している。これらの虚実まじりの一連の話材を増幅させていった末、「人はばけもの」という人間の真の姿の発見で結んだ。つまり人間こそ怪異的な存在であり、真に不思議な存在である人間に対し、西鶴は限りない関心を示していた。

そういうような人間観察の目には、一体どのような意味が含まれているのであろうか。浮橋康彦氏は、近世という時代背景を合わせて論述を行った。

> 「人は化物」（諸国咄序）と言う人間観は、西鶴の文学方法に対応する面と同時に、人間じたいの近世的特質からも来ている。中世において自然と連続した存在として認識された人間が、商業資本主義と封建体制の秩序化によって、人間的情動を多様に解放していく、それが「人は化物」という不可思議感、多様感を支えている(5)。

中世において「自然と連続した存在として認識された」人間が、近世という「秩序化」された時代に「人間的情動を多様に解放していく」という視点は一見矛盾しているようであるが、よく考えると、物事が極端になると必ず逆の結果が生じるという法則に裏付けられると考える。秩序に束縛される人間は、極限状態に置かれてしまったときに

は、必ず出口を探してみようとするはずなのである。ここで無限の可能性を持っている人間というものは、時には異様な姿や形に化けて現れたり、時には異常な能力を見せたりして可変的で把握できない「ばけもの」的な存在になる。言い換えれば厳しく規範されるからこそ、既存の境界を超越しようとする衝動が生まれ、人間本来の姿が具現化されると考える。西鶴は「人はばけもの」を基軸とし、人間存在の不可解さと人間の心の不思議さに焦点を当て、読者に人間の多面性を感得させる新しい奇談を作り出そうとしたのである。

好色物作者として出発した西鶴は、『西鶴諸国はなし』までに、『好色一代男』『諸艶大鑑』を刊行し、『西鶴諸国はなし』が出版された翌年に『好色五人女』や『好色一代女』を世に出した。これらの一群の好色物の中間に発表された、前の主題や作品の傾向とは大分違っている『西鶴諸国はなし』は、西鶴の浮世草子作者としての活動が徐々に本格化し、多様性を帯びる時期の到来を象徴したのである(6)。遊里という好色の世界から諸国における浮世の諸相へと新しい方向に進んでいったという西鶴作品風格の変遷は、創作上の越境とも見なせると思う。さらにこの作品の序文では、西鶴は日常生活圏「以外」の世界へ突入し、視圏外に発生する「意外」を発見した。ここで越境の中の越境、つまり越境の二重性が生み出され、作品読みに新しい視角を提供すると思う。

四、異類からの訪問

『西鶴諸国はなし』という西鶴が「世間の広き事」を創作原点として諸国を次々に舞台に設定しながら、「はなしの種」を発展させていった作品は、千姿万態の世相の縮影になり、異事奇聞の集大成ともいえる。序文の「世間の広き事」とは、後に来る人間の常識範囲外の現象を導き出した一句であり、間接的に人間以外の異類の存在を認めたのである。

異類とは、人間の生活空間に入り込む非人間的な存在を意味する。動物や化け物、幽霊などはこの類に属している。この中では、特に動物は人間と日常生活圏域を共にしながら非常に密接な関係を持っている。この人間にとって最も身近にいる異類に対し、人間は馴染みを持つ一方、広漠の荒野という未開の土地に棲息する動物に時々不可解さを感じ、そこから信頼と不安の錯綜する人獣交渉がだんだん成り立ってきた。このような題材は文学作品においていつも扱われ、動物がよく支配と征服、あるいは嫌悪と恐怖の対象として描かれているが、『西鶴諸国はなし』の動物譚はそれ以外、人間と動物の愛情や葛藤に着目する傾向も見られる。巻一の七「狐四天王」は人間が狐への何気ない悪戯をきっかけとして展開され、最後に狐の「恨」による復讐という形で結末を迎える。「世間の眉毛おもふまゝに読て、人をなぶる事自由なり」という本文の冒頭の叙述から本話の狐一族は単に平凡な動物ではなく、人間を上回る超能力を備える異類であるとうかがえ、人間が頂点にある秩序の中で人間に支配されている動物として位置づけられることができない。しかし、門兵衛は何気なく小狐を誤殺した後、死体をそのまま放置してしまい、「ふびんとばかりおも」いつつ去っていった。狐たちは仕返しのため、門兵衛の家屋に石の雨を落下させたという予告をはじめ、犯人隠匿という虚構の罪から門兵衛の息子門右衛門の嫁への誣告や門兵衛の作り葬礼まで行い、最も忌避されている訃報で狐の「お姫さま」を殺した門兵衛本人だけではなく、ほとんど一家全員に懲罰を加えた。このブラックユーモアを混ぜた筆調で描かれている一話は、最後に「髪ははへずしておかし」という諧謔的な結末を迎える。ここで狐は門兵衛一家を次々と坊主頭にさせたというワンパターンな復仇手段の裏側に潜んでいるのは、人間に坊主の慈悲心を思い出させ、確実に殺生の罪を反省させようとする動機であり、ある意味で人間の「何心もな」い残酷への非難であると考える。確かに狐はいたずらをしたり迷惑をかけたりして人間に殺生の悪行を気付かせたが、人間の命を奪わなかった。これに対し、意味もなく小狐を撃殺した人間のばけもの性がいっそう明らかになるのである。「狐四天王」

は、狐の利口ぶりで窮地まで追い込まれた人間の愚かさを徹底的に皮肉ったと同時に、人間と動物との交渉に存在する人間の傲慢さをも指摘している。

さらに巻四の一「形は昼のまね」の夜中に人形に「執心」して勝手に操る狸も、異能で人間に驚かせた。上述の狐、狸のいたずらとは違い、巻五の三「楽のまこの手」の遁世者流円坊に円山上人の衣を差し出し、上人遷化を通知する霊力のあるまこは、人間に対して親交の深い友達ともいえよう。しかし、こうした親密な人獣関係はいったん変調すれば、巻四の七「鯉のちらし紋」のような人間により成立し、また人間により破棄された人鯉恋は、「惣じて生類を、ふかくてなれる事なかれ」という遺憾な結果に終わった。『西鶴諸国はなし』における動物はほとんど異類性と人間性を兼ねている存在と描かれ、いずれも擬人化された姿で荒原から越境して人間界に出没し、人間の想像力の沃野で活躍している。この動物を人間と同じ土俵に上げているという意義は、これらの話を通し、人間の幻想への満足と人性への皮肉が表現できるからである。

巻二の一「姿の飛のり物」という女の怨霊による怪異も『西鶴諸国はなし』における異類話の一類型を示している。「往来の人も絶」えた無人の環境で一挺の女乗物が放置され、その中には若くてきれいな女性がいた。そういう女性に馬方が言い寄り、いたずらをしようとする瞬間に、女は、もとの「都めきたる女良」の容姿から「左右へ蛇のかしらを出し、男どもに喰付」いた悪相に転じ、「世のさまたげとな」った。この豹変の背後にある原因といえば、おそらくこの女は以前に馬方のような身分のいやしい「荒男」にひどい目に遭わされたので発狂して死んだということが暗示されている。それゆえこの女は、異常になった体験が再現されそうになったこの時点で女の乱れた黒髪のイメージと重なっている蛇を出させ、男に嚙み付いた。ここで怪異へのスイッチを押すのは荒男の不作法であり、言い換えれば人間のばけもの性こそ怪談を次々と爆発させる導火線であると西鶴は示唆した。この女乗物は街道の所々に

飛び行き、人を悩ましたという不思議な現象は、「慶安年中迄はありしが、いつとなく絶て、『橋本・狐川のわたりに、見なれぬ玉火の出し』と、里人の語りし」。この怪異の消失は、おそらく年忌行事と関連付けられるのであろう。冒頭の「寛永弐年・・・」という怪異発生の序曲から「慶安年中迄・・・」という怪異の終章まではおよそ四半世紀の期間を経ている。この二十数年の長さは何を表わしているかといえば、この女の無残に死んだ後の霊は、成仏する前にこの世にまだいろいろな恨みや憤りとかを持ってさまよい続け、不特定な男性に対して片っ端から懲らしめてやる。しかしまもなく弔い上げと称される最終の年忌である三十三回忌を迎える時、追善供養のおかげで今まで解消しえない怨念がだんだん薄れていき、最後に名残りとして「玉火」というものに化し、成仏への道をたどりついていった。また巻三の四「紫女」では、伊織という一人暮らしの男が「仏の道」を離れ、「人の血を吸、一命をと」った紫女の美貌に魅了されて次第に衰弱していった。紫女という夜に潜伏する女の幽霊が境界を越えてこの世に飛び込んでき、「死」という形で昼に活動する人間の男の「生」を次第に侵蝕する。この話は人間の心の暗部に迫る根源的な恐怖を伝達する一方、人間のばけもの性は磁石のように異類を吸いつけさせ、越境を誘発することも指摘した。

こうした無残な死、あるいは非業の死を遂げ、自分の死亡という事実を認められないものは怨霊となって生と死のどちらでもない境界的存在であるとされる。『西鶴諸国はなし』に登場する怨霊には女性が多く、外には巻二の三「水筋の抜け道」の店の主人の女房に虐待されて海に身投し、怨霊に化して女房に「報い」をする奉公の女ひさや、巻二の五「夢路の風車」の侍に仇討を頼む二人の女商人の幽霊などが上げられる。幽霊は人の世だけでなく、人間の心の暗部や影の領域まで潜んでいるとも言えよう。

果たして、異類とは一体何なのであろうか。一度変身を経た異類はどこまでが人間で、どこからが異類なのであろうか。人間から見れば、異類は疑いなく異類であるが、もし見方を反転すると、異類から見れば人間こそ異類なので

ある。異類というものを解釈し分類する権力を握る人間は、自らの優越性を確保するなどの理由に基づき、人間と異類の間に壁を立て、「人・ばけもの」という対立構造を創出した。しかし、西鶴はいつも人とばけものの間に介在している境界を打破し、「人はばけもの」を視座に据え、「人＝ばけもの」という新しい図式を提示した。「人＝ばけもの」により打開された人間と異類が接続される通路は、『西鶴諸国はなし』の話を越境の果てへ引き連れていくのである。この特異な双方向性により、異類の持つ獣性の中の人性と、人間の持つ人性の中の獣性が注目され、異類に対する描写はまさに真の人間の姿を映し出す鏡としての機能を果たしているのである。

五、異界への訪問

異界とは、人間が周囲の世界を分類する際、自分（たち）が属する（と認識する）世界の外側の世界のことを指している(7)。この明快かつ簡潔な定義を詳しく説明すれば、異界は人間の主観認知により、日常生活を営む空間の周辺に広がり、認識不可能の世界であると想定される。ここで異界という概念に含まれている二重の意味がいっそう明確に見えてくると思う。つまり異界には、大別して空間的に距離のある所に存在すると信じられる異界と、人間の想像力により生み出され、現実世界と重なり合いながら常識を超える空想上の異界とがある。ここでは後者を中心に考察を展開しようと思う。異界の観念は、境界の観念と深く関わる。橋・坂・峠などの境界の場所は、異界への回路であり、両義的な空間である(8)。そもそもこの均質ではない世界が大地という座標の上に、山、森や湖、海などといった自然の地形、あるいは門、壁などの人為的な建造物により境界が形成され、この境界の外側に位置する禁忌される混沌とした空間は異界と見なされた。要するに境界は、隔離と連結という互いに対立しながら依存する機能を果たしているのである。

この現世と異界という二極化された空間認識は、各学問領域において世界を解読する一つの手がかりとして語られてきた。『西鶴諸国はなし』から切り込み、『好色一代男』、『諸艶大鑑』、『男色大鑑』、『好色五人女』、『日本永代蔵』、『世間胸算用』などの作品を例証として西鶴の描いた非日常の世界を分析した森耕一氏は、「異界」ということばは、主人公たちが住む世界の日常的秩序とは異なった秩序（あるいは無秩序）によって支配された世界、異なった情念や行動の論理が人間を動かしている非日常的な世界と定義づけたのである(9)。この文学の作品世界における異界の定義は、「秩序」や「無秩序」という文脈に従い、民俗学のように異界の「怪」が強調される傾向とは違って「異」という部分が重視されるともいえる。『西鶴諸国はなし』では異界への憧れと好奇心に駆られ、禁忌の境界を侵犯して異界に参入しようとするという作中人物の行動を通し、西鶴が不可視の異界に対する想像を作品に反映し、読者も紙上で構築された異界を巡遊し、擬似体験を楽しむことができる。

巻二の二「十二人の俄坊主」は、紀州の国守、徳川頼宣が加太の浦での船遊びを描く一篇である。本話の中心は、このにぎやかなる遊びの最中、淡島神社のあたりから、高波とともに大蛇が現われ、小舟ごと十二人のつわものを呑み込んでしまうというのである。人間が陸地より不可視の海の彼岸への憧憬が大きいという傾向がみられ、海上移動という日常性を脱却する不安定な状態に伴い、怪奇であり不思議な出来事もそれに付随して発生する。西鶴はここで大蛇の出た理由を「阿波嶋の神垣のあたりも荒し、若も人々酒興せしに」と阿波嶋神社の神域に侵入して荒した神罰とする。結局大蛇のしりへ抜けたが、皆は「かしら髪一筋もなく」、俄坊主となった。西鶴は、海という背景にカットシーンみたい、一見繋がりが薄い三つの話を組み合わせ、最後に大蛇に呑み込まれたという恐怖な体験に、全員が丸坊主になったということで滑稽味を加える。陸上の生活空間から離れ、「おふねは浦々めぐれば」、自由自在に船に乗って行楽し、阿波嶋の神垣という聖域への侵犯までしており、精神的な解放感が倍増したようになるこの時、海上

に起こった異変がすべての越境行為を話の最初の「夏海の静」に回収してしまった。

また巻二の五「夢路の風車」と巻三の五「行末の宝舟」で描かれる山中の隠れ里と湖底の竜宮の光景は、まさに異界の具現化なのである。「夢路の風車」では、奉行は日常の次元から、岩穴をくぐりぬけてまったく幻境のような「隠里」に辿っていた。しかしこの異界は、表面が平和な理想郷であるが、裏側が「此国にては命みぢかし」という危険な喜見城である。「行末の宝舟」もこの系列にある。諏訪湖に沈み、死んだはずの馬方勘内はこの世に帰還し、竜宮の絶妙を誇張して言い、彼の巧言に乗せられて異界へ船出した六人は帰ってこなかった。竜宮は一見理想的な極楽境であるが、二度と戻れない死の世界でもある。

上述の二話では、異界は現実と感覚的に連続しているようであるが、それはやはり非現実の、異質の時間の支配する世界なので、「喜見城」であれ、竜宮であれ、当初はユートピアとされていたものが、話の流れにより、異界の危険の本質は次第に露呈し、結局読者の目の前に呈示される異界の風景は、楽園の虚像に過ぎないのである。異界への訪問は、一種の死と再生の趣向として描かれている。換言すれば、つまり「異界に連れ去られる＝現世での死」という図式が見られると考えられる。さらに『西鶴諸国はなし』では、西鶴によって描き出された異界は、一見人間界とはまったく違った空間であるが、その内実を見ればこの世と瓜二つの世界であることがうかがえる。「夢路の風車」における殺人、盗難が発生する「隠里」と、「行末の宝舟」における「正月も盆も、爰とすこしも違ふた事な」い「竜の中都」は、いずれも人間界の様態を鏡に映したような、類似性の高い存在である。西鶴は、異界の素晴らしさや醜さに着眼するのではなく、異界の人間界と相似する部分にだけ着目する。

「夢路の風車」と「行末の宝舟」において西鶴は理想郷ではなく危険と死に満ち溢れた世界である異界を創出し、「爰とすこしも違ふた事なし」というところに重点を置いた。これはおそらく西鶴の異界認識の独自性の所在である

と考えられる。重ねて言えば、西鶴は異界訪問譚の枠組みを用いながら、こちら側の世界の本質を逆照射して浮かび上がらせたに違いないのである。この「異」に「同」を見い出そうとする西鶴の作意には注目すべきである。こうして異界をもう一つの人間界として見つめる描写の仕方により、本作品の中心思想ともいえる「人はばけもの」の延長線上にある「世間は異界」という『西鶴諸国はなし』の作品構造はいっそう明らかにされるのである。

六、現実と非現実の境界―夢―

夢とは、単純に言えば寝ている間に起こる擬似体験の一種である。目を閉じて睡眠状態に入った後、頭の中で展開される日常生活の断片、あるいは奇想天外な思いつきなど、いずれも夢境の旋律を構成する音符なのである。現代では、夢は非現実的なものであるとされ、信憑性が低いと思われている。しかし、昔の人々は夢に対し、きわめて重要な役割を認めていた。現実と非現実の境界線上に存在している夢は、古くから予兆を把握したり神託を獲得したりする回路として認識されてきた。また日常の論理を離脱し、無意識下の心境を表出する夢は、人間を合理的世界から本能的世界へと導き、肉体という枷から逸脱した精神の解放を求める場とも見られる。

『西鶴諸国はなし』における夢は、上述の特質を備えながら、現実と非現実を結びつき、話の奇談としての性格を色濃く反映している。夢が怪異発生の場として決定的な役割を担っている最初の話は、巻一の二「見せぬ所は女大工」である。「御所方の奥つぼね」で起こった守宮の怪異と奥さまの夢物語が重ね合い、女大工により不思議の正体が解明されたこの一話において周囲の人々が夢うつつのうちに真実か幻覚かを分かりにくくなり、この時奥さまの恐ろしい御夢物語が取り込まれ、話における夢の二重構造が成り立った。目覚めた奥さまは「我うしろ骨とおもふ所に、大釘をうち込とおぼしめすより、魂きゆるがごとくならせられし」という、体に異変が起こった。最後に、この

怪異の根源は祈祷札の間に金釘でとじられた守宮であると判明された。四つ手は守宮の象徴であり、奥さまの背骨あたりの激痛は、守宮の釘付けされた痛さの感応とも言える。「御所方の奥つぼね」にとじこめられて苦悶する奥さまの抑圧された不安が、深層心理の反映とされる夢に現れ、さらに札板の中に釘で打ち付けられた守宮により、夢と現実の結合になると統合される。

夢は超越界との交流を果たす経路として機能している話は、巻二の三「水筋の抜け道」もあげられる。小浜の越後屋の下女ひさは美人であり、商人庄吉と将来を約束した。越後屋の女房がこれを見とがめ、ひさに対する嫉妬心から顔に焼火箸を押し当て、ひさはそれを苦にして入水自殺する。ひさの死骸が遠く離れた大和の国秋篠の里の地下水脈から地上に出現した。この話を聞いた庄吉はすぐ出家し、秋篠の里へ行ってひさの塚に参り、つい寝入ってしまうと、その夢は「火もへし車に、女弐人とり乗て、飛くるを見るに、正しく伝助が女房也。是を押て、焼かねあつるは、我なれしひさが姿の替る事なし。「今ぞおもひを晴らしけるぞ」と、いふ声ばかりして消ぬ。三月十一日の事なるに、日も時も違はず、若狭にて、一声さけびて、むなしくなりけると也。」女房から残酷な私刑を受け、果ては自殺まで追いやるひさは、最後には怨霊になり、女房を取り殺して復讐する。庄吉の夢の中の出来事と、現実の女房の死に符合するのは、死者との交感を内容とするこの夢と現実の重層が見られる。もともと夢の世界での復讐は他人に感知されることができるわけがないし、夢が現実界へ闖入するのも不可能である。むしろ塚の前で「むかしの事ども申つくし」、出家してひさの霊を供養する庄吉の思いがひさに届け、さらにひさの復讐への執念があまりにも深いので、夢という形でひさは庄吉に報復の場面を見せ、それを確認させることで、「今ぞおもひを晴らしけるぞ」と言い、本話も終わりを告げる。夢が古来、神託を得る一つの通路であり、機会であったことは、よく知られていると思う。ひさは怨霊であって神仏ではないが、そういう夢託の思想が踏まれているとみることができる。つまり夢はすで

に死去したひさの意思表示のルートでもあったというのである。夢によって庄吉とひさの悲恋に幕が降ろされるというのが「水筋の抜け道」という話の趣向である。

また巻三の七「因果のぬけ穴」でも、判八の夢に現われた判兵衛のしゃれこうべは、自分が前世で悪事を働いたから殺されたのであり、因果の必然性を説き、判八に敵討ちを思い止まって仏門に入るように勧めた。判兵衛は夢と現実の虚・実という構図を逆転させて弥平次との敵対関係の真実を道破し、一つの事件を表裏の関係で解明した。しかし、武士と自認し、虚構の自分にこだわりつづける判八は、夢の告げで知っても敵討ちを強行しようとする。そもそも判兵衛と弥平次は、前世の因果で現世はお互いに敵討ちし合う関係になったので、敵討ちに対する執念を放棄しない以上、このぬけ穴から解脱しきれないのである。つまり、来世になってもまたこの因果にめぐり合うわけである。この話の夢はあの世から越境してくるメッセージとしてはたらいているほか、判兵衛一門が因果の連鎖から逃れ得ないという話の前後の展開をも緊密に結びつけている。以上の二話では、あの世から越境してくるメッセージとして描かれた夢は、不可解さや虚構性を脱却し、具体的に事件の真相を告げた。これにより非現実と現実は結びつけられ、話の地平も広げられた。

夢託の思想を踏まえながら作り上げられた以上の二話とは異なり、巻二の四「残る物とて金の鍋」における夢は、謡曲『邯鄲』の詞章を踏襲し、同時に展開される四季の景色で一種の仙境の体験を象徴する。この話では、木綿買いと仙人である老人の出会いから展開し、飲酒遊宴の場面で盛り上がって享楽的な時間に陶酔し、我を忘れた境地に至った様子が活写された。仙人との奇遇に誘発された木綿買いの夢は、「花がちれば餅をつき、蚊屋をたゝめば月が出、門松もあれば、大踊あり。盆も正月も一度に、昼とも夜ともしれず」という、四季の素晴らしさが同時に現れ、、短時間に享楽の極みを達した素敵な一時である。木綿買いの夢は、無邪気な非合理と、現実にとらわれない

「自由」な空想を色取り、奇抜な行楽図として紙上に現われた。ここで夢は、他界からの知らせを伝達するものではなく、無意識的に開放された欲望の濃縮図なのである。

『西鶴諸国はなし』における夢は、異次元から現世への一方通行の場とされる夢の局限を突破し、自発的に潜在的願望を開放する場ともなっている。ここで『西鶴諸国はなし』における夢の多面性が見られる。西鶴は、意識的に夢の超時間性・超空間性・非合理性などの要素を話の中に取り入れ、話の境界を広めていった。『西鶴諸国はなし』では、夢という非在への架橋を通し、現実世界での満足されない欲望や癒されない思いや解決不能の問題が、非現実世界で解消される。また夢により生と死の隔てがなくなり、他界にある人と夢という交流形式で対話が成り立つ。夢を通し、現実・非現実の世界や生死の越境を遂げた。また、夢は非現実の産物だけではなく、現実をいっそう明らかに浮上させようとする機能をも持っている。夢は鏡のように物事の裏側や人間心理の深層を忠実に映し出し、一種の心の出口になっている。

こうした話の筋に織り込まれる夢は、作品の彩をいっそう鮮やかに引き立てるのである。生きている限り、煩悩や妄執が完全に払拭できない人間にとって、定められた運命と潜在的な願望との葛藤は、夢により一時的な慰めが与えられ、夢はまさに人生の旅路にある仮宿のように、人間の心の休憩所と言っても過言ではないと思う。夢かうつつか、時々見分けることのできないこの世の中は、無常であり、いつも移り変わるので、夢は虚妄で不確なものというより、むしろこの世の真実のありようを描き出す絵巻にも喩えられると考える。夢としての現実、あるいは現実としての夢という神秘的二重性を西鶴は巧みに話の中に織り込み、虚実まじりの文学的空間を創出し、幻想・虚妄と見なされる夢に新しい意味を付与しようと試みた。

七、終わりに―越境のもたらすもの

『西鶴諸国はなし』では、異類譚、異界訪問譚、奇談などの話が混在しているが、越境というモチーフで話の統合的な読みを求めることは可能である。「世間の広き事、国々を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ」という『西鶴諸国はなし』の序文に示すように、旅といういわゆる越境体験を通し、世間の広さを知り、珍聞を収集する作者西鶴の姿勢から、この作品に即して越境という概念は、序文から本文にかけて一種のテクストへの理解の仕方として見なすことができると思う。

世の中では、有形・無形の境界が交錯し、つねに変化して流動する姿を示している。境界は境外と境内という対立的に存在している二つの秩序の間に介在し、行動や思想を規制する装置として認められる。しかし、境外に溢れている異質な空気の帯びる不思議な魅力に思わず惹かれ、意識するかしないかのうちに境界を通り過ぎ、向こう側へ行ってしまうという行為は、一言で言うと越境なのである。人間の生活を活性化させる要素として、越境は不可欠なのである。人間は越境することにより生活に新鮮味を与え、新しい刺激と創造性を確保することができるのである。越境は目的地に至るための手段だけでなく、自分を取り込む環境から離脱し、遥かなもの、未知のものへの探索や冒険という意義も含まれている。

このように境界を越える小さな一歩の裏側にある意義は予想以上に大きいものである。越境とは単に地理的な境界ではなく、肉体的あるいは精神的な境界を突破する経験ともいえる。境界を越えた瞬間、すべての秩序や規範が一時的に停止し、混沌が世界の基調になる。あらゆる価値、人、あるいは事物も、通常属している文脈から離脱し、他の事物、つまり意外としか言いようのない事物と結びつき、日常生活では現われない一面を露呈する。

『西鶴諸国はなし』における境界は、まるで「行末の宝舟」の話にある諏訪湖のように、そこの湖面の融ける／氷ることにより、異界への入り口は開放／閉鎖される。したがって境界は隔てではなく接点である。境界を越えた瞬間、異界と人間界の差異・対立は解消され、融合される。『西鶴諸国はなし』における越境の意義は、境界を越え、山中の隠里や海底の竜宮などの異界にたどりついた主人公たちは、この過程の中で遭遇した今までの経験に収容し切れない出来事により、現実の世界の性格を明確化し、境界の両側で働く論理の差異がどれほど大きいかを実感した。本書の序文の「世にない物はなし」という一句も、ある意味で越境という行為の動機がうかがえると考える。「どのようなものでも、ないものは何もない、というのがこの世の中」という語釈(10)により、それまでの生活の場所を離れ、何でもある世間へと旅立つという越境冒険は、むしろ自らの不足から出発し、理想を探求する旅ともいえよう。『西鶴諸国はなし』に見られる人間の竜宮、理想郷への訪問、異類の人間世界への参入や脱現実の夢などは、いずれも不完全的な自分、あるいは不条理的な現実への不満足がもたらす越境なのである。この「欠乏と補足」という枠組みは、『西鶴諸国はなし』における越境という構成要素を把握するのに適していると思う。

異なった秩序がぶつり合っているいわゆる接点である境界を大胆に越えることは、確かに摩擦を生じさせ、危険に立たせる可能性がある。しかし、越境という現象は、紛争を引き起こしたり安定を破壊したりしている一方、越境といういわば外部の世界へ赴いたり往還したりする循環過程により、自らを解放し、生まれ変わるという体験を持つことができる。この越境体験がエネルギーの発生をもたらし、新しい刺激を持ち込んでくるので、活性化や変化のきっかけともなれる。

『西鶴諸国はなし』の世界では、越境者たちにより境界の此方と彼方の交流が達成され、この頻繁の接触・往来は話の流れの連動を導き、話の空間も次第に増幅していくのである。この危機であり転機である越境の諸相は、主人公

たちの行動様式を通して多種多様なあり方を示している。越境という行為の裏側にある深意はテクストの分析・読解によりいっそう明らかにできると考える。越境という視点は『西鶴諸国はなし』の作品世界に見事に照明を当て、一つの切り口として新たな『西鶴諸国はなし』読みの角度を提供し、新たな観点と認識を創り出し、作品理解の深化を促すのである。

註

(1) 中嶋隆『初期浮世草子の展開』、若草書房、一九九六。
(2) 前田愛『都市空間のなかの文学』、筑摩書房、一九九二。
(3) ここで前田氏に引用されたのは、「人は、自らを、特定の時間の中で境界の上または中に置くことによって、日常生活の効用性に支配された時間、空間の軛から自らを解き放ち、自らの行為、言語が潜在的に持っている意味作用と直面し、『生れ変る』といった体験を持つことが出来る。」（山口昌男『文化と両義性』、岩波書店、一九七五。）という段落である。つまり「境界の上または中に置く」という人の行動様式から一種の自己選択がうかがえ、この選択により日常の軌道から脱出し、非日常における新生体験を体得することができるということである。
(4) 井上敏幸校注『新日本古典文学大系76　好色二代男・西鶴諸国ばなし・本朝二十不孝』、岩波書店、一九九一。
(5) 浮橋康彦「西鶴文学の反語的性格」、『日本文学研究資料叢書　西鶴』、有精堂、一九六九。
(6) 麻生磯次・冨士昭雄『決定版　対訳西鶴全集5　西鶴諸国ばなし・懐硯』（明治書院、一九九二）解説参照。
(7) 福田アジオら編『日本民俗大辞典〈上〉』、吉川弘文館、一九九九。
(8) 小峯和明『説話の声―中世世界の語り・うた・笑い』、新曜社、二〇〇〇。
(9) 森耕一『西鶴論―性愛と金のダイナミズム』、おうふう、二〇〇四。
(10) 宗政五十緒ら編『新編日本古典文学全集67　井原西鶴集②』小学館、一九九六。

参考文献

テキスト

1. 井上敏幸校注『新日本古典文学大系(76)　好色二代男・西鶴諸国ばなし・本朝二十不孝』、岩波書店、一九九一。
2. 麻生磯次・富士昭雄『決定版　対訳西鶴全集(5)　西鶴諸国ばなし・懐硯』、明治書院、一九九二。
3. 宗政五十緒『新編日本古典文学全集(67)井原西鶴集(2)』、小学館、一九九六。

単行本

1. 植田一夫『西鶴文芸の研究』、笠間書院、一九七九。
2. 日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書　西鶴』、有精堂、一九六九。
3. 江口孝夫『夢についての研究』、風間書房、一九八七。
4. 西島孜哉『近世文学の女性像』、世界思想社、一九九三。
5. 谷脇理史『西鶴必携』、學燈社、一九九三。
6. 白倉一由『西鶴文芸の研究』、明治書院、一九九四。
7. 荒川有史『西鶴　人間喜劇の文学』、こうち書房、一九九四。
8. 暉峻康隆等『西鶴への招待』、岩波書店、一九九五。
9. 中嶋隆『初期浮世草子の展開』、若草書房、一九九六。
10. 有働裕『西鶴　はなしの想像力』、翰林書房、一九九八。
11. 堀切実『読みかえられる西鶴』、ぺりかん社、二〇〇一。
12. 森耕一『西鶴論―性愛と金のダイナミズム』、おうふう、二〇〇四。
13. 江本裕『西鶴研究―小説篇』、新典社、二〇〇五。
14. 前田愛『都市空間のなかの文学』、筑摩書房、一九九二。

論文

1. 水田潤「西鶴「諸国はなし」の近世的性格」、『論究日本文学』第36巻、一九七三。
2. 井上敏幸「『西鶴諸国はなし』攷―仙郷譚と武家物―」、『国語国文』第45巻10号、一九七六。

3. 堤精二「「近年諸国咄」の成立過程」、『日本文学研究大成　西鶴』、国書刊行会、一九八九。
4. 井上敏幸「艶笑譚の背景―「傘の御託宣」小考」、『江戸の笑い』、明治書院、一九八九。
5. 西島孜哉「『西鶴諸国ばなし』の主題と方法―成立の必然性―」、『西鶴と浮世草子』、桜楓社、一九八九。
6. 井上敏幸「『西鶴諸国ばなし』三題」、『江戸時代文学誌』第7巻、一九九〇。
7. 平林香織「『西鶴諸国はなし』における夢―巻二の四「残る物とて金の鍋」の場合」、『文芸研究』第125巻、一九九〇。
8. 岡本勝「『西鶴諸国ばなし』の方法」、『論集近世文学』第3巻、一九九一。
9. 後小路薫「『西鶴諸国はなし』「十二人の俄坊主」の素材」、『文芸論叢』第41巻、一九九三。
10. 篠原進「西鶴というメディア―『大下馬』の毒」、『日本文学』第43巻10号、一九九四。
11. 佐藤毅「井原西鶴の描いた信州―『諸国はなし』を軸に―」、『駒木原国文』第8巻、一九九七。
12. 山本恵子「『西鶴諸国はなし』巻三の五―「行末の宝舟」の素材と方法」、『国文橘』第23巻、一九九七。
13. 森田雅也「『西鶴諸国はなし』の余白（マルジュ）―その序文からの読みをめぐって」、『日本文芸研究』第50巻4号、一九九九。
14. 森田雅也「『西鶴諸国はなし』試論（上）―「人はばけもの」論」、『日本文芸研究』第51巻3号、一九九九。
15. 森田雅也「『西鶴諸国はなし』試論（下）―「人はばけもの」論」、『日本文芸研究』第53巻2号、二〇〇一。
16. 森田雅也「「年をかさねし狐狸の業ぞかし」考―西鶴と出版統制令に関する一考察―」、『日本文芸研究』第54巻第4号、二〇〇三。
17. 宮澤照恵「『西鶴諸国はなし』咄の創作―「見せぬ所は女大工」の構想をめぐって―」、『北星論集』第43巻第1号、二〇〇五。

【付記】本論文作成に際し、二〇〇七年度春学期提携校留学生として、関西学院大学大学院文学研究科教授　森田雅也先生の研究演習で御指導いただいた。記して感謝申し上げたい。

（チョウ　シンジョ・購読会員・台湾国立政治大学大学院修士課程）